

令和2年度 第3回沼田市市民構想会議の概要について

1 日 時 令和2年10月7日（水）午後2時から午後4時

2 場 所 沼田市役所 第2委員会室（テラス沼田5階）

3 出席者

（1）委 員 片桐徹憲委員、小野要二委員、青木富士夫委員、小林昭紀委員、
生方秀二委員、岡嶋稜子委員、小野里順子委員、田辺祐己委員、
六本木勇治委員、小林好委員、武井義明委員、原口庄二郎委員、
小池大介委員 （13名）

（2）アドバイザー 篠田 暢之氏

（3）沼田市 五十嵐副市長、川方総務部長

（事務局：矢代企画政策課長、生方政策推進係長、清水副主幹）

4 配付資料

- ・次第
- ・令和2年度第2回沼田市市民構想会議の概要について
- ・アドバイザー・委員提供資料

5 概 要

（1）開 会（事務局：企画政策課長）

（2）会長あいさつ

<生方会長>

寒くなるようですので、風邪などひかぬよう気を付けていただきたい。

（3）前回の会議結果について（事務局：企画政策課長）

「第2回沼田市市民構想会議の概要について」により説明した。

（4）議 題

1）提言に向けた検討について

<アドバイザー>

前回会議では3つのテーマを決定し、①沼田の広報力の向上、②少子高齢化対策、③地域コミュニティの再構築と拠点づくりの順番で議論すると確認されました。しかし沼田の広報力の向上も、少子高齢化対策も大きな枠組で考える

と地域コミュニティの再構築と拠点づくりにつながる考え方や仕組み造りがそこで議論される可能性が高いため順番を入れ替え最初に地域コミュニティの再構築と拠点づくりを、2つ目に沼田の広報力の向上、3つ目に少子高齢化対策として、議論して頂くことを改めて提案させていただきました。

議論するテーマの順番を変更させて頂く背景には、今や地理的・経済的格差の縮小が想定される5Gサービスによって「地域コミュニティの再構築と拠点づくり」を再考するよう促されているからです。これは沼田市にとって千載一遇の機会であり、取組しだいでは地方に住む価値を大きく高めていける新たな条件を活用でき、その効果を期待できるからです。

今のところ人口減少は止められません。2009年から全国で毎年50万人を超す方々が亡くなられ、中核都市の人口に相当する街が丸ごと毎年、日本から失われており、それが11年も続いています。出生数は最少を更新し、日本を目指し来日する在留外国人も増えています。人口減少が自治体の税収悪化を招き、地域の健全運営を崩壊に導く負の要因となることは明らかです。

「地域コミュニティの再構築」は人口5万人を基準に、それを超える場合と、その基準以下の場合では、街づくりの視点が大きく異なる事は既にお伝えしました。沼田市は5万人に届かない後者に属しており、人口から考えるとむしろ最適解を得られる条件に該当している事から、街づくりの議論次第では豊かな街づくりが可能です。縮小均衡時代の街づくりに必要な規模はむしろ小さ過ぎず・大き過ぎない、ほどほどの規模が快適性を生み魅力が評価される時代です。

その為の街づくりの手掛かりは「アクセシビリティ」です。街への様々な接続があらゆる面で便利で利用しやすい等、出入りのしやすさ、物や人の出入りの容易さ等、街の再点検と整備が必要です。この点に注力すれば、消える街とならず、利便性や快適性が生む残る街として、魅力ある維持が可能です。

アクセシビリティの街づくりに必要とされる条件として潤いが必要です。長い歴史を有する沼田市には街の発展と共に長く住み、街を支えてきた方も多く、新しい方には馴染みにくさを感じられたと思われれます。しかし新しい地域コミュニティ形成には、古くからの住人の方と新しい住民の方が、共に良好な関係を作る交わりが、新しい快適で住み良い街を形成することは明らかです。

アクセスの良い街には潤いが生まれ、顔が見える人の直接的な交わりが街の魅力を生み出す源となります。従来の顔見知りの関係が維持できず希薄になっていく現状を打破するには、顔が見える交わりの場所を作ることが大切な視点です。この点からも人の温もりが感じられる街づくりが待たれているのです。

在宅での仕事が時代の流れとなりました。その結果、地方に住むメリットが再評価され、地方への移住が加速すると視られています。その流れを勢いづける条件は「人の温もり」です。人の温もりが地域に人を集める力となるのです。未来の沼田の街づくりには新時代を見すえた考え方が必要です。

<テーマに関する意見交換> ～地域コミュニティの再構築と拠点づくり～

- 薄根地区の現在の組織図をお配りしたが、昭和の合併の際に、薄根地区振興協議会を設立し、75年が経過しており、地域をまとめる役割を果たしてきたが、今まで通りでは地域は衰退します。そのため地域活性化等に取り組む団体が活動を始めています。既存の組織の点検とこれからの新しい拠点づくりについて、未来を見据えて進めることが極めて重要です。
- 5年、10年が経過すると、五感や体感での接触より、情報の受発信が重視され、距離をおきながら情報を共有するようなコミュニティとなり、20年後には、今の私たちでは想像つかない世界になっているのではないかと思う。以前の会議で、パラダイム・チェンジの発言があったが、発想の転換は必要です。テレワークの誘致といっても地方は同じようなことを考えており、経済的な優遇や施設整備など、アピールしなければ沼田市の魅力が伝わらない。ある程度、便利さがあり会社から離れて仕事ができるような土台が必要です。沼田市の姉妹都市フュッセン市も市民に向けたホームページがわかりやすく、情報発信は外に向けるだけでなく市民に向けても行うべきで、そうした取り組みも重要である。
- コロナ禍の前後で変わったことは働き方である。テレワークで半分くらいの仕事は可能となるため、テレワークができるような環境を整えれば良いのではないか。
- 商工会で商品を作っても、次に繋がらない。ある農家が500円で売っていたトマトジュースを銀座のぐんまちゃん家では1,500円で販売したら好評だった。安いだけではなく、付加価値をつけないといけない。市だけでなく、商工会も農協も一丸となって、全体で地域を盛り上げないといけない。後継者や働く人を確保するためには、沼田に戻れる仕組みを考える必要がある。そうした意味からも、物を作るより人にお金をかけた方が良い。
- 利根沼田夢大学で感じたことは、暮らしている地域の中だけを見るのではなく、隣の地域の特徴と重ね合わせたりすることも必要である。暮らす地域が違っても一緒に学ぶ若者たちと地域との関わり方や、他の世代の人たちとの

関わり方を見直す必要があるように痛感する。また、沼田起業塾のN3というネットワークで実施した地域の国際化を見直す取組を通じてオンラインにより国際社会は近くなり学びや交流の機会も可能性が広がることを感じた。地域の魅力をオンラインで届ける取組も実施したが、発信だけでなく、相互交流もできた。また、地域の産品に東京の企業が興味を示し新しい取引も生まれ、可能性も広がってきている。こういう取組は若者には当たり前の感覚でリアルとデジタルが共存する世界で若者は生きている。次の若い世代のために人を中心としつつ、加えてデジタル環境の整備を作る必要がある。

- まずはコミュニティを知ることが大切である。近所のお茶のみ友達が一番身近なコミュニティと考えるが、環境や関係性が変わってもコミュニティを継続させることが大切である。少子高齢化の中では、互助に加え共助が大切で、皆で支え合っていくのが地域の形である。高齢の方にも障害の方にも助けてもらわないと地域が成り立たない。日本人は温泉が好きなので、温泉などを拠点とした地域コミュニティや、薄根地区のように活動の中に拠点を作っていくのが良い。制度もお金の流れも変わるため、同じことをしていても同じ状況を保てない。新しい見方による活動が必要であり、その活動を発信して知ってもらう必要もある。
- 昔は各家庭に子どもたちが5～6人いて賑やかだったが、今は子どもたちの姿が見えない。街が静かで子どもの声がしないのは侘しい。文化庁の事業で伝統文化子ども教室を開催しており、以前は40人程いたが、今は半分になった。何とか回復できるような打開策がないかを感じている。
- みずほフィナンシャルグループでは、週4休・3休制度を導入するとの報道があった。本給は減るが働き方改革であり、メガバンクから同様な取組が広がった場合、都会から地方へ移住する方が増えるのではないか。都会の人が利根沼田に来るのは難しいが、利根沼田で育った人が利根沼田で生活できるよう受入れていく必要がある。丸沼高原では、ワーケーション（work+vacation）として、キャンプ場で遊びながら仕事をしようという取組が紹介されていたが、沼田はワーケーションだけでなく、住んで仕事ができる環境整備が必要である。また、孺恋村ではふるさと納税の返礼品として、体験型事業を提供するが、沼田市でも効果があるように思うので検討してはどうか。
- 沼田に住み、東京の会社に勤めているが、テレワーク以外は出勤しなければならず、交通費が高額となる。働きながら農業ができるような仕組みを作って欲しい。

- 各地域には特色があるが、他の地域のことは知らないことが多い。各地域の特色をお互いに把握して、助けあっていければ良いと思う。
- コロナの影響から経済が縮小し、7割経済となっている。外食や旅行を控えるなど支出も減少している。内閣府の調査では、全国の35%がテレワークを経験するなど働き方改革が進んでいる。何が必要で何が不必要か見極める時期である。人とのつながりが大切である。
- インターネットを通じてのコミュニケーションが当たり前になり、ネットとリアルの共存を認めた上で、目標を立てていけば良い。ふるさと納税やクラウドファンディングなどは、ネットで繋がっている。コロナ禍であっても顔を見ながら電話ができ、会わなくても繋がっていられる。
- コミュニティの拠点づくりには人が必要。人が活動できる施設整備を市で実施して欲しい。
- 住み続けるためにどうしたらよいか。これからも暮らしていく中で、ビジネスを探る必要がある。

<テーマに関する意見交換> ～沼田の広報力の向上～

- 何かを見るのではなく、体験しに来ることが多い。薄根地区ではワークショップを行い、資源を探して磨いて発信する作業を実施している。地区単位で同様なことができれば魅力を発信できると考える。
- 自然は人間が磨いて加工する必要がある。迦葉山や玉原高原は整備されているが、百名山である皇海山は、林道等も整備されておらず残念である。
- 若者が一番外部と繋がっている。受け手と情報がマッチする必要がある。
- 資源の再発見と地区単位での魅力を発信。コロナで地域の再発見ができた。
- 新宿の森なども整備して欲しい。
- 「お前はまだグンマを知らない」を参考に、沼田市を発信してもよいと思う。

<アドバイザー>

コロナ禍により現在「世界同時・鎖国」が経済に深刻な影響を与えています。デジタル技術が進化してその技術を活用する動きが加速していますが、一方でそれに比例するように、人間の温かさや直接的な触れあいなど、アナログ的な価値や関りが求められています。顔が見える、潤いを感じられ、心の機微に繋がるものが、これからは財産として提供できるか？ どうすれば享受できるか？が人々の関心を集めてもいます。そういった意味で「アクセシビリティ」

の重要性を、種々な視点からご検討いただければと思います。人・もの・情報・社会の安全・安心のシステムの再構築が新たに求められていると考えます。

<副市長>

人口が減り高齢者が増え、次の世代が縮小していくことを肌で感じています。支える人間が少なくなり、支えなければいけない人が増えていく社会で、どのように持続可能な地域を作っていくのが命題であると思います。

高齢者でも元気な方は大勢おられますので、その方たちが活躍される拠点や繋がりの再構築が、人と人との繋がりと温もりを感じながら、地域の良いところを発信し、持続可能な地域を作っていけるという思いが、本日の皆さんの発言であったと感じました。

情報の発信も顔の見える関係の中で、地域を単位として掘り起こしていくことから、地域の良さを磨き上げ、まさにデジタルを使って発信していければ良いと思います。地域の拠点がまさにPRの拠点にもなるような提言であったと感じました。

2) その他

- ・次回の会議日程について説明し、確認いただいた。追加資料等ある場合は事前に送付する。提言書は1月を目途にまとめたい。

<第4回> 11月11日(水)

(5) 閉会(事務局:企画政策課長)